



2013年8月21日放送

## 「風疹の流行と先天性風疹症候群」

国立感染症研究所 感染症疫学センター室長  
多屋 馨子

### 風疹の症状

きょうは風疹の流行と先天性風疹症候群のお話をさせていただきます。

風疹は発熱、全身の発疹、リンパ節の腫脹を主な症状としますが、三つの症状がそろわないことはよくあります。また、感染しても症状が出ない不顕性感染が15-30%程度あると言われています。

しかし、逆に合併症を起こして重症になり、中にはICUに入院される方もいます。

風疹の合併症で主なものとしては、風疹脳炎や血小板減少性紫斑病がありますが、昨年の流行で風疹脳炎が5人、血小板減少性紫斑病が13人報告されています。一方、ことしは、7月7日時点で既に風疹脳炎が11人と血小板減少性紫斑病が54人報告されていますので、決してすぐに軽快する方ばかりではないことがわかります。

### 感染経路

風疹ウイルスは飛沫感染で感染します。潜伏期間は2-3週間です。少し対策として難しいところは、発疹が出る前後1週間に周りの人にうつしてしまうことがあるということです。発疹が出る前1週間から人にうつすということは、発症した本人は気がつかない間にうつしてしまっているということになります。

ことし1月から6月までの報告で、どこで感染したかということ調べた調査があります。職場が最も多く、次いでご家族から、そして学校や保育所、塾などで、その次に医療機関でという回答が




ありました。多くは職場で感染したというのがことしの流行となっています。

風疹は、基本再生産数（1人が周りにいる免疫のない何人にうつしてしまうかという数字）が、5-7人とされています。例えば、冬に流行するインフルエンザが1-2人程度、はしかが12-18人程度とされていますので、風疹の感染力の強さが理解できると思います。

### 風疹を予防すべき理由


どうして風疹を予防したいのか。それは、妊娠20週ぐらいまでの妊婦が風疹にかけると、先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれる可能性があるからです。特に妊娠1カ月や2カ月で感染した場合にその頻度は高くなりますが、決して100%の赤ちゃんに影響が出るわけではありません。お母さんが発疹を出された方の1/3程度の赤ちゃんに感染が生じ、その1/3程度の赤ちゃんに症状が出ます。

目と耳と心臓が症状が出る主な部位です。例えば耳、すなわち難聴、これが最も頻度が高く、そして白内障や先天性緑内障、色素性網膜症などが特徴的です。先天性心疾患の中では、動脈管開存症が最も多いとされています。そのほか、生まれたときの体重が軽かったり、精神運動発達が少しゆっくりしているといった症状が出る場合があります。



**先天性風疹症候群（CRS）**

- ・ **主症状**: 難聴(最も頻度高い)、白内障または先天性緑内障、色素性網膜症、
- ・ **先天性心疾患**(動脈管開存、心室中隔欠損、肺動脈狭窄、大動脈縮窄)
- ・ **その他の症状**: 小眼症、血小板減少性紫斑病、脾腫、肝機能異常、小頭症、精神運動発達遅滞、髄膜脳炎、X線透過性の骨病変、生後24時間以内に出現した黄疸、低出生体重、溶血性貧血、間質性肺炎

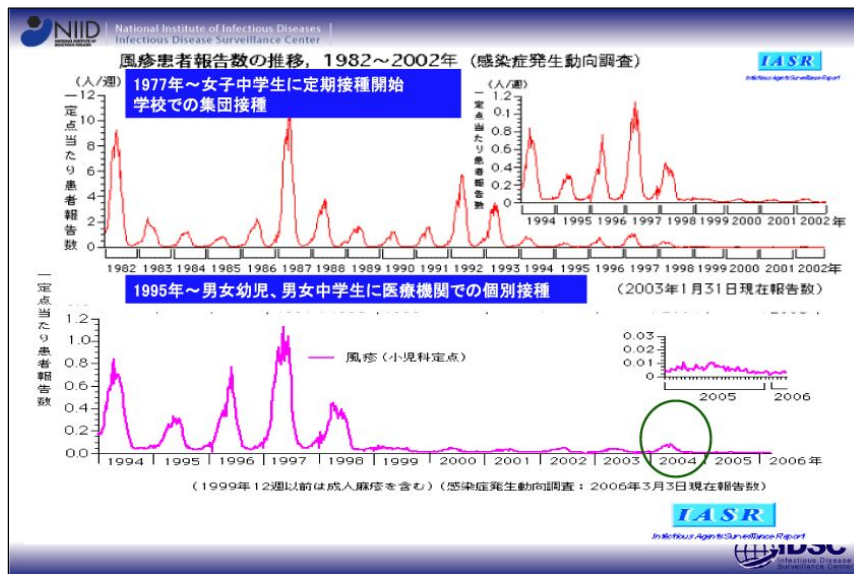


### ワクチン接種

1977年から、日本は風疹ワクチンを定期的予防接種に導入して風疹の対策に当たってきましたが、最初は女子中学生だけが接種の対象でした。学校での集団接種でしたので、非常に高い接種率でした。ただ、女性だけがワクチンを接種していたのでは、何年かに1回起こる大規模な風疹の流行はコントロールすることができませんでした。そのため、1995年4月から、1-7歳半までの男女幼児と中学生は男女ともが定期接種の対象になりました。しかし、大きく変わったのは、学校での集団接種から、保護者同伴でかかりつけ医の医療機関に行って受ける個別接種に変わったことです。これは大きな変化でした。そのため、中学生の接種率が10%台と激減してしまいました。しかし、1-7歳半までの男女幼児がワクチン接種の対象になったことにより、風疹の流行規模は随分小さくなりました。

しかし、2004年、成人も巻き込んだ風疹の地域流行があり、10人の赤ちゃんが先天

性風疹症候群と診断されました。以前は風疹が流行すると、先天性風疹症候群の赤ちゃんのことを心配になられて、妊娠を諦めてしまう方がいらっしゃいました。そんなことはあってはいけないと、産婦人科医がチームをつくって、二次相談窓口を全国に置いています。

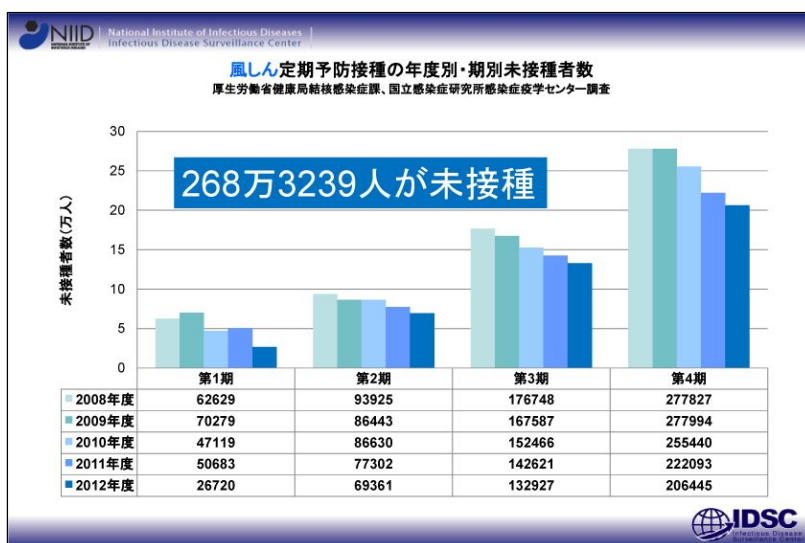


さて、風疹の予防接種ですが、2007年のはしか(麻疹)の流行をきっかけに、はしかも風疹も2回予防接種が広がりました。2回の予防接種は2006年度から始まっていたのですが、2007年のはしかの流行が10-20歳代の流行だったこともあり、中学1年生と高校3年生相当年齢で2回目のワクチンをはしかと風疹の混合ワクチンで受けることに変わったのです。

もともとあった1歳と小学校入学前1年間の2回接種は非常に高い接種率が維持されており、1期も95%以上を3年連続しています。また、2期も93%まで上がってきています。

一方、中1と高3の接種率は、以前のような10%台ということではなく、80%台まで上がっており、これはかなりの成果だったと考えています。

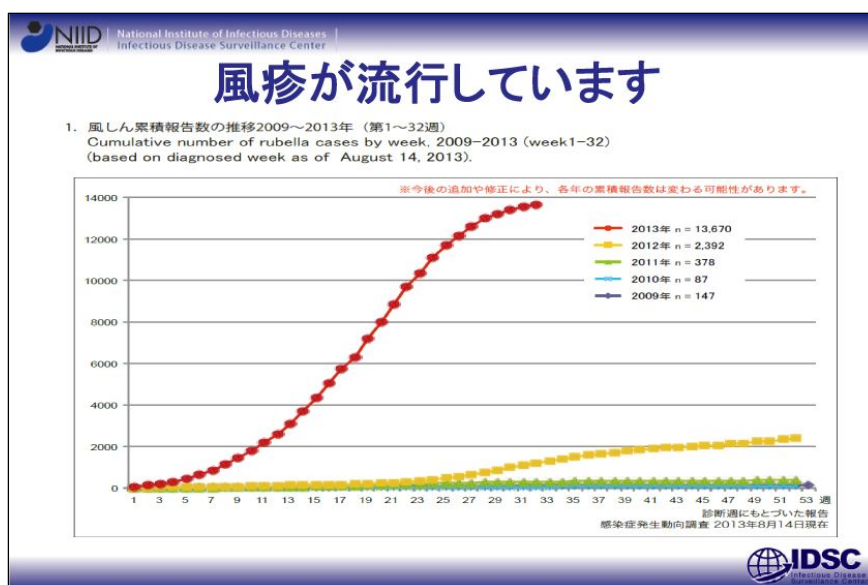
5年間で2039万541人が風疹を含むワクチン接種を受けました。ただ、残念なことに、268万3239人は、この1年間のチャンスを逃し、未接種のまま終わっています。特に高校3年生で受ける機会があった4期の接種率が低かったと言えます。



そのような中、世界でも風疹を何とか排除しようと努力をしているわけですが、南北アメリカ大陸は、既に2010年に風疹は排除宣言をしています。ヨーロッパも2015年を風疹排除の目標年にしています。日本を含めた西太平洋地域はまだ目標年は持っていませんが、風疹の流行を何とか排除しようと考えているのはどこも同じです。

## 風疹の流行

そのような中、2011年にアジアの国々では大規模な風疹の流行が起こっていました。そこに、風疹ワクチン接種を受けていなかった今の34歳以上の男性、すなわち、ワクチンを接種する受けるチャンスが一度もなく、風疹の免疫を持っていない人が渡航しました。風疹の免疫を持っていない人は2-3割程度います。特に30代、40代の男性は風疹の免疫を持っていない人が多く、2011年当時に、海外に行って感染を受けて帰国して発症し、そして周囲にうつしてしまう、そういう小さな集団発生が幾つか起こっていました。それが2012年は全国流行になり、2013年はさらに大規模な流行になって、8月14日現在の集計で1万3670人と、昨年1年間の



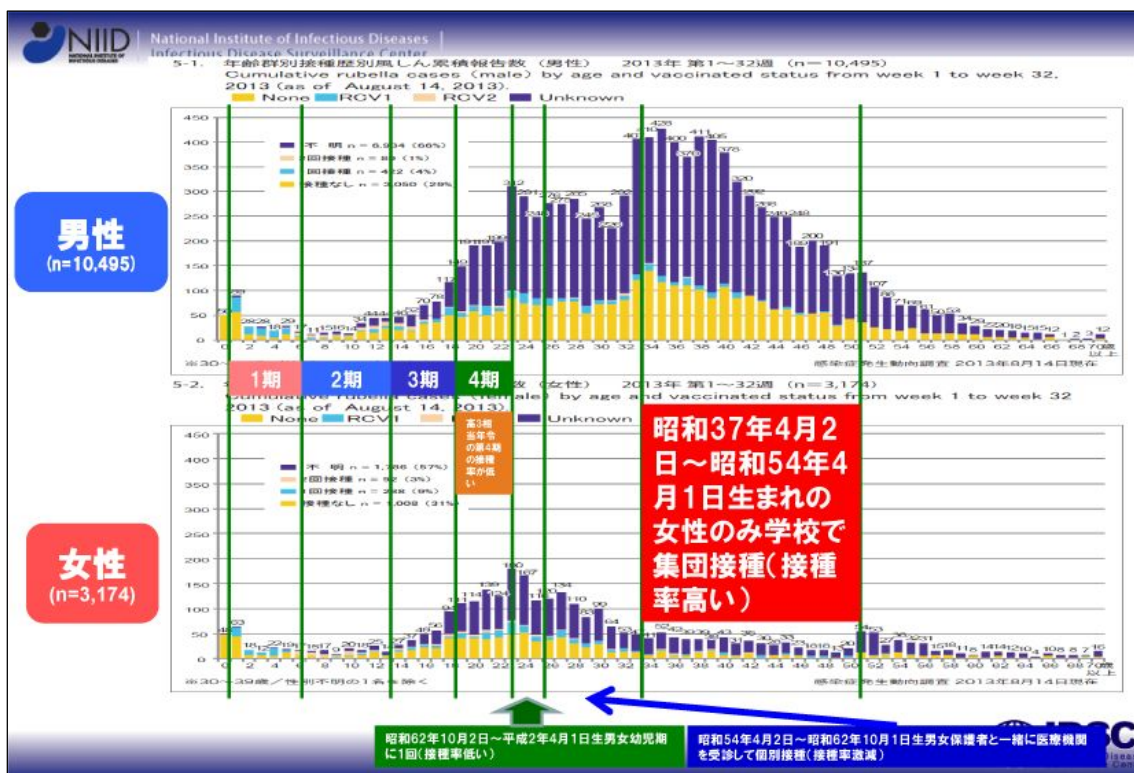
2392人を大きく上回る報告数となっています。

去年のピークは第30週（7月下旬）でしたが、ことしは5月をピークに患者の報告数は徐々に減少してきています。理由として、ことしの4月以降、多くの市区町村や企業で風疹ワクチン接種費用の助成という機運が高まっていることもあるかと思えます。

流行している地域は、特に関東地方と近畿地方に多く、次いで九州地方も多く患者が報告されています。人口100万人当たり全国では107人と、比較的大きな流行になっているのがことしの特徴です。

ことしの特徴は、これまでの定期予防接種制度で十分説明がつかず。すなわち、昭和37年4月2日から昭和54年4月1日生まれの女性（現在34歳から50歳まで）は、学校で集団接種を受けていたので、接種率が高く余り罹患していません。

一方、同年代の男性は一度もワクチン接種を受けていませんので、多くの方が今、発症されています。男性患者数が女性の約3.3倍となっています。



次に、25歳6カ月-33歳までの人、すなわち、学校で接種を受けず、保護者同伴で病院に行って受けることになった中学生ですが、接種率が低かったために多く発症しています。

また、現在23歳以下の人はどこかで2回目のワクチン接種を受ける機会がありましたが、今、24歳以上の方は1回、あるいはゼロ回の風疹ワクチンの接種機会でしたので、罹っている人が多くいます。そして、23歳以下の人というのは、風疹のワクチンを2回受けていることが多いので、全体の患者の9割が大人です。子どもでなぜかかっているのか、それは子どもはワクチン接種を受けているので罹患していないだけで、決して大人がかかりやすい病気だというわけではありません。大人はワクチン接種を受けておらず、免疫がない人が多いので、現在、発症しているのです。男性は特に20代、30代、40代が多く、女性は20代が最も多く報告されています。

### 風疹から胎児と妊婦を守る

昨年からの流行で、先天性風疹症候群の赤ちゃんが去年の10月からことしの8月の半ばまでに16人報告されました。これは、去年からことしの初期の頃の流行の影響で、妊娠中に罹患した人の赤ちゃんが先天性風疹症候群と診断されているのだと思いますが、それ以降の流行規模がかなり大きかったため、ことしの秋から冬にかけて心配をしています。

では、風疹ワクチンは何度受ければいいのでしょうか。1回だと、残念ながら5-10%程度の方は抗体を持つことができませんので、そのため、2回ワクチンを勧めています。

妊娠中は接種できませんので、ぜひ妊娠を希望される女性は妊娠する前に2回のワクチン接種を受けていただきたいと思いますし、周囲に妊婦がいる男性の方は、ぜひ一緒にワクチン接種を受けて、ご自身を守り、そして周囲の妊婦と胎児を風疹から守ってあげてほしいと思います。

風疹ワクチンが一時期足りなくなるかもしれないという話もありましたが、今は多くのワクチンが製造され、需給に関しては随分落ちついてきていると聞いています。

ぜひ、妊婦と胎児を風疹からみんなで守っていきましょう。